

メッセージアウトライン マタイの福音書1：18～25 「イエス・キリストの誕生」

[18]「イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった」

当時のユダヤの婚姻制度について。

一般にユダヤの結婚には三つの段階があった。第一は婚約。婚約はしばしば二人がまだ子どもの時に両親か専門の仲人によって決められた。それゆえ、当人同士はお互いに会っていない場合もしばしばであった。ユダヤでは結婚は、人間の情や、思い付きにまかせるのは、あまりにも重大な事柄だと考えられていた。第二の段階は、いいなずけ(許嫁)である。これは先に取り決めた婚約を承認することであって、もし娘が結婚する意志がない場合には、その婚約を破棄することができた。しかし、ひとたびいいなずけになると、絶対に解消することはできなかった。その間、二人は対外的には夫、妻として取り扱われたが、まだ夫や妻としての権利はもっていなかった。そして、いいなずけの解消は離婚以外にはできなかった。マリアとヨセフはこのいいなずけの関係にあった。この期間、マリアは正式にヨセフの妻として知られていた。第三段階は結婚式である。一年ほどの婚約期間が終わってから、結婚式を挙げ、実際の夫婦生活に入ることができた。

そのような順序で、やがて婚約期間が終わり、花婿ヨセフは友人を伴って、花嫁マリアを迎えに行き、夫婦生活に入るのであるが、ここでヨセフをたじろがせる出来事がすでに起こっていた。

二人がまだ一緒にならないうちにマリアが身重になっていたのである。このことを知ったとき、ヨセフは非常に驚いたことであろう。

[19]「夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしたくなかったので、ひそかに離縁しようと思った」

ここで言う「正しい人」とはヨセフが真に敬虔なユダヤ人であることを意味する。それは心の態度も行いも神の前に潔白であるということである。そのようなヨセフにとって、身重になったマリアと結婚式を挙げるといことはとうてい考えられることではなかった。そんな彼には二つの選択が可能であった。第一は旧約の律法に従った処置をとることである。申命記22:22-24には姦淫の罪は死刑に処せられることにな

っている。これはまさに彼女をさらし者にするのであった。そしてもう一つの方法は寛大な当時の離婚法によって、離婚状を書いて去らせることであった。→マルコ10:3-4、申命記24:1-4 ヨセフが後者を選んだのは「…さらし者にしなかつたので、ひそかに離縁しようと思った」という表現からも分かる。。

しかし、マリアはいったいどのように身重になったのか。すぐに思いつくのは、ヨセフ以外の男性とマリアが関係を持ったということである。もしそうなら、マリアから生まれてくる子は神ではなく、単なる私生児として生まれた一介の人間でしかなくなってしまう。そしてキリスト教というものも、土台のない家のようになって、崩壊してしまい、もはやこの世には真の救いもなく、希望もなくなってしまうであろう。しかし、18節にはマリアは「聖霊によって身ごもっている」とある。これはどういう意味であろうか。これについては20節を見なければならない。

[20]「彼がこのことを思い巡らしていたところ、見よ、主の使いが夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです』」

ヨセフの決心が実行に移される前に神は介入された。神はご自身の時を知っておられる。主の使いがヨセフが寝ているときに夢に現れたのである。主の使いが現れるときにはいつも特別なメッセージを携えてくる。神は各個人に適した啓示の仕方をされる。日中、突然主の使いが現れる場合もあるし、夢の中で現れる場合もある。→士師記13:2-5、ルカ1:26、マタイ2:13、28:1-7

ヨセフの場合は夢に主の使いが現れることであった。主の使いが言う「ダビデの子ヨセフ」とはヨセフがダビデ王家の子孫であることを示している。「恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい」とは、法律上の夫であるヨセフの家に迎えて夫婦としての生活を実際に始めてよいことを示している。「恐れずに」とは恐れる必要はないということである。なぜならマリアは不貞の罪を犯したのではなく、その胎に宿っているのは聖霊によるからであった。それゆえマリアを迎えるということは、神の御子の母親となる者を守り、救い主誕生という大いなる出来事に、大きな役割を果たすことであった。産まれてくるイエスはマリアを母とする「人の子」であると同時に神を父とする「神の子」でもあった。彼はダビデに約束された来るべき救い主として、ダビデの末から生まれなければならなかつたのである。それでマリアを母とする正真正銘の一人の人間として、しかもダビデの子孫ヨセフを法的に父とする夫婦関係の中で、その長男として生まれられたのである。そしてそれと同時に、彼は神の子、

すなわち神そのものであられたのである。イエスは私生児でもなく、また単性生殖によって生まれられたのでもなく、実に聖霊によって生まれられたのである。聖霊は三位一体の第三位格である聖霊なる神である。聖霊は神の天地創造に携わられたお方であり、この聖霊の働きによって神の御子なるイエスは処女マリアの胎に宿られたのである。→創世記1:2, 詩篇33:6,104:30,ルカ1:35

旧約にも神の介入によって誕生したイサクやサムエル等の例があり、バプテスマのヨハネの誕生も神の働きによるものであった。しかし、それらは、いずれも妻が不妊であったが、主なる神の恵みによって、夫との普通の夫婦生活の中で、子どもが産まれるようにして下さったのである。しかし、イエスの誕生には人間の父親は必要ではなかった。それにもかかわらず、神の御子イエスが単なる未婚の一処女からではなく、夫ヨセフのまぎれもない妻となったマリアから生まれられたということは、神の定められた結婚という制度に荣誉を帰するものである。→創世記2:24

このようにして神の御子なるイエスは人間の世界に来られたのである。

[21]「『マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。』」

ここでは主の使いによって、マリアが男の子を産むこと、その名をイエスとつけるべきことが言われている。なぜイエスという名でなければならなかったのか。このイエスということばは、旧約聖書で使われているヘブル語ではヨシュアということばであり、それは「救い」という意味であり、それを新約聖書の当時使われていたギリシア語に訳すと「イエス」となる。(正確な発音はイエスース)

それゆえ、ご自分の民をその罪から救ってくださるお方の名前は、主の使いが教えたとおり「イエス」という名が一番ふさわしいのである。

ちなみに「キリスト」とは旧約聖書のヘブル語では「メシヤ」であり、これは油注がれた者という意味で、王や大祭司などに対して用いられたが、後にはダビデの血統としてこの世に救い主として来られるお方に用いられることとなった。新約では主に名づけられたイエスの名に終始添えられているので、「イエス・キリスト」が実質上は一つの固有名詞になっている。

「ご自分の民」とは直接的にはユダヤ人(イスラエル人)であるが、さらに広い意味では、救われるべきすべての人のことでもある。→マタイ28:18~20

「その罪からお救いになる」…この罪は最初の人間アダムの墮落から始まる。→創世記2:15~17,3章,マルコ7:21~23,ローマ1:20~25,3:23~26

普通の人間の男性と女性から生まれた人ならば、すでにアダム以来の罪（原罪＝神のさばきを受け、永遠の滅びに行く→創世記2:17、へブル9:27、黙示録20:12-15）を持っており、罪の贖い（身代わりとなって死ぬこと）はできない。それゆえ人間の罪の贖いには罪のない人間が必要なのであり、イエスはそのために人となってこの世に来てくださったのである。

[22-23]「このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。『見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』それは、訳すと『神が私たちとともにおられる』という意味である」

「このすべての出来事」とは処女降誕にまつわるすべての出来事のことである。そしてこの出来事は、実は旧約聖書の預言の成就であったのである。23節で引用されていることばは旧約のイザヤ書7:14節の預言の引用であり、成就なのである。イザヤはBC8世紀にユダヤにおいて国家の存亡、捕囚と帰還、やがて来られるメシアに関する描写、世界の終末に関する歴史観等を長期にわたって預言活動をした預言者であり、その中で彼はこのイエスの誕生を見事に預言しているのである。

「インマヌエル」とは23節で説明されているとおり「神が私たちとともにおられる」という意味であり、それは今まで目に見えなかった神の臨在が今や歴史上に事実となり、神が肉体をとってその民のうちに住まれるということなのである。→マタイ28:20
[24-25]「ヨセフは眠りから覚めると主の使いが命じたとおりにし、自分の妻を迎え入れたが、子を産むまでは彼女を知ることはなかった。そして、その子の名をイエスとつけた」

「子を産むまでは彼女を知ることはなかった」とは夫婦としてマリアと性関係を持たなかったという意味である。

このようにしてヨセフは服従することにより、神の計画と目的を達成した。神の計画は私たち人間が信仰をもって、聞き従うことによって進んで行くのである。→ヤコブ1:22-25

このようにしてヨセフとマリアは神の計画に従い、産まれてくる子の法的父親と母親となり、その子にイエスと名をつけることによってその子を自分の家族の一員として認め、人の子としてお生まれになった救い主を守り、成長させることになったのである。